

審査員

小説部門

武蔵野大学名誉教授 三田 誠広、宮川 健郎

武蔵野大学教授 土屋 忍、川西 宏之

俳句部門

武蔵野大学教授 井上 弘美、三浦 一朗

●選考経過

小説部門は、応募総数 35 編の中から 3 編を最終候補として選び、選考会議で討議した結果、三善早葵さんの『引越し祝い』を最優秀賞に決定した。最終選考に残った作品はいずれもレベルが高く、審査員の推挙する作品もそれぞれに異なり、また、評価が激しくわかれる作品もあった。このため、今年度は特例として審査員特別賞を設け、小田菜さんの『夏霞』に授与することとした。優秀賞受賞の杉山梨奈さんの『岬の海』も決して見劣りする作品ではなく、例年の水準では最優秀作に匹敵する出来ばえだった。俳句部門は、複数句の部に 6 編の応募があり、最優秀作は該当作なし、優秀作に野城知里さんの『日々の雫』が選ばれた。また、一句単独の部には 145 句の応募があり、最優秀作には該当作がなかったものの、優秀作に伊藤彰洋さん、佐藤琳利子さん、佳作には 9 句が選出された。

●小説部門 選評

三田 誠広

『引越し祝い』（三善早葵）は引越祝いに「月」が届くという話です。この「月」とは何か、どういう仕組みになっているのかは、最後まで説明されません。説明し過ぎないところがこの作品の最大の長所です。とぼけた作品ですが、文章に安定感があります。こういう引越祝いが届くのは、寂しい人に限られるのではないのでしょうか。そのヒロインの寂しさがよく描けています。『夏霞』（小田菜）は性同一性障害の問題を扱っています。社会的テーマに挑んだ点は評価できますが、文章がセンチメンタルな方向に流れていて、切実さは伝わってきませんが視野が狭くなっています。もう少し冷静に、描く対象との間に距離をとる姿勢が必要です。『岬の海』（杉山梨奈）は不思議な作品です。途中まで何を書こうとしているのかよくわからないのですが、この岬が死の世界との境界線に位置していることが見えてきます。もつと整理して書いて欲しいと思いましたが、奇妙な後味を残す作品になっており、秀作だと思いません。

宮川 健郎

最終候補作品三編を読んだ。今回は、例年にましてレベルが高い。

「引越し祝いに送られてきたダンボールには月が入っていた。」——『引越し祝い』

の書き出しである。いきなり読者を作品世界に引き込む力わざだ。ダンボールを開けて出てきたのは春の月で、桜の花びらとともに送られてきた。引越しの多い「私」の人生や、卒業した高校で知り合ったヤスとのかかわりが、つぎつぎと届く月とともに語られる。月とは何のことなのか、簡単にはこたえられない象徴性があり、その象徴性が作品の完成度を高めて、見事な小説になった。

私自身は、『岬の海』を強く推した。作品は、「私」が店番をする岬のバス停の前の店を中心に展開する。その世界を語る文章の息づかいが心地よくて、何回でも読めてしまう。「私」と、四歳年上の健ちゃん付き合いも好ましい。中ごろになって「補陀落渡海」ということばが取り込まれ、作品に「意味」があたえられていくけれど、作品は、「意味」からもっと遠く逃れて、ただ夏の海を書けばよかったのかもしれない。

『夏霞』の「私」の語りは「私」の心の内を描き出すが、「私」から見た弟の侑の人物像がおしまいまで想像しづらい。読者としての私は、『夏霞』を十分に読み切れなかった。

土屋忍

『引越し祝い』は、胎児の自由意志により出産する母体を選択できるという設定がとても興味深い。引越しという名の夜逃げを母親とともに乗り越えてきた「私」が上京したところから物語は始まり、「引越し祝い」に月の入ったダンボールが送られてくる。「恐怖」はやがて東京の都市部に生息する「背広やスーツの人達」にとって代わるのだが、「月」の存在感と比べて「東京」の捉え方がやや陳腐であった。『岬の海』の都は、バス停近くのお店で店番をしながら、自殺の名所である岬への出入りを数えている。バスの運転手をしていたお父さんを「うっかり」亡くした彼女は、「迎え盆」を控えて「父のことばかり考えている」。友人とのやりとりを通じて、父の死を受けとめようとしていく様子がうまく描かれているが、「過疎の村」の描写と「補陀落」への洞察が少し足りないように思われた。『夏霞』もまた他の2作と同様に、父親不在の家族が物語の中心に置かれている。頭脳明晰で繊細な都会の男子像が姉の目を通して才気走るように描かれており、家族は「最初から歪んでいた」という弟の台詞は極めてリアルである。感覚的に理解が及ばない読者もいるかもしれないとも思われ、だからこそこの作品を推したかった。

川西宏之

受賞した三作はそれぞれに魅力がある。『夏霞』(小田菜)は書き手の感覚がよく活かされた作品だ。圧迫や緊張を空気として伝えることは難しいが、この作品では主人公の感じる違和や不安、緊張が鮮明に伝わってくる。多少、生硬で大仰な言葉遣いはあるものの、それすら、主人公たちの現実への違和を表現するのに役立つように思う。短編小説の結構も整っていて、構成にも書き手の戦略が表れている。弟が短冊になにを書いたのか？ 最後それが明らかになった時、震えがきた。私はこの作品を推した。『引越し祝い』(三善早葵)はバランスの良い作品に仕上がっている。贈り物としての月、という発想は面白いし、それが、主人公の日常⇨現実世界の中に自然に置かれて、十分に機能している。淡々とした語り

でありながら、現実の一面を切り取り、重層的に世界を描き出す力には感服する以外ない。『岬の海』（杉山梨奈）は、夏の気だるさの中に、生と死が溶け合う異質な（特別な）空間を的確に描き出している。書き手の詩的なセンスが論理を超えて文章に活かされるようになること、さらに充実した作品が生み出されることだろう。

高校生の手になるこれら三作にめぐり逢えたことを心から喜んでいきます。

●俳句部門 選評 井上弘美、三浦一朗

一句単独の部

【優秀賞】

八月十五日アイスクリームの溶けていく

冬眠やぬいぐるみの目は開いたまま

「八月十五日」という終戦記念日を季語として、暑い日の気怠い昼下がりをおぼろしく「アイスクリームの溶けていく」という情景を切り取ったことで、比類の無い印象鮮明な一句となった。この作品は日本近代の負の歴史を背負った敗戦記念日を時間に設定したことで、日常的な気怠さが、けじめがついたようで付かず、終わったようで終わっていない戦後のメタファーとして効果的に機能している。残念なのは「八月十五日」が秋の季語であり、「アイスクリーム」が夏の季語、さらに一句全体が九・八・五音と二十音あり、全体が長くやや散文的だという点である。以上の点から、最優秀賞作品として推すことが出来ず残念だった。

「冬眠」というテーマに対して、冬眠する動物を詠むのではなく、目を閉じない「ぬいぐるみ」をイメージした点にセンスの良さが感じられる。この「ぬいぐるみ」が物置かどこかで存在を忘れ去られたものなら、閉じないままの眼が不気味であり、置き去りにされた悲しみや嘆きを想わせて独特の味わいがある。また、部屋に飾られている「ぬいぐるみ」なら、決して眼を閉じることが許されず、そこに存在し続けることの哀れさを感じさせる。残念なのは、ぬいぐるみに限らず、人形の眼が開いたままであるということ詠んだ句はすでに多く存在するという点である。作者にとっては知る由も無いことだろうが、受賞作にはオリジナリティーが求められる。

【佳作】

「チューリップ」は、打ち消し表現によって整然と並ぶ同色のチューリップを表現することに成功。「紙芝居」は場面の切り取りが鮮明。「瘡蓋」は梅雨期の不快感を身体表現で捉えている。「トランペット」は唇と金管楽器の質感の違いを生かして「涼し」が生きた。流れ

星」は「嘯みながら」に巧まざるユーモアが感じられ、素朴な詠みぶりに好感がもてる。「角刈り」は「冬ぬくし」が日常の中の心理的暖かさを捉えている。「過ぎる」は動く「貨物列車」の上に澄んだ「秋の空」を置いた構成力が良い。

複数句の部

【優秀賞】

日々の雫

二十句が早春から始まって、冬で終わる構成になっていて、季節の推移を丁寧に捉えている。日頃から俳句に向き合っていることで、季語もバラエティーに富んでいる。「花冷え」の句は桜の咲く頃の冷たい雨を「白」という色彩で捉え、雨の彼方から聞こえる鐘の音を配することで視覚・聴覚によって情感ある世界を描出している。「雲に名を」や「オリオンに」の句には視点の新しさや、読みぶりの伸びやかさも感じられる。しかし、取り合わせて詠んだ「たのしきは」や「もう一度」の句は、季語にどれくらい作者の実感が込められているのか疑問に感じた。また、題名は作品の顔なので、焦点を定めるほうが良い。今後の可能性を感じる作品だった。